

大阪は「まち」がほんまにおもしろい



大阪を救った薩摩隼人・五代友厚

～官を辞して、民に身を投じた志士～

薩摩に生まれ、長崎で学び、諸外国で見聞した知識を、いかに大阪に注ぎこんだ五代友厚。江戸時代の繁栄から明治維新によって急激に落ち込んだ大阪経済を、官の立場から、官を辞した後は民の立場から、あらゆる手法を用いて立て直した大阪の恩人・五代友厚。五代ゆかりの地を巡ります。

五代友厚(1835～1885)

薩摩に生まれ、幼名を才助と言った五代は、安政4年(1857)に長崎に遊学し、海軍伝習所の伝習生として航海・測量・砲術・数学など当時最先端の知識を身に付け、文久2年(1862)に長崎で御船奉行副役となりました。慶応元年(1865)には14名の学生を引率してヨーロッパを視察し、翌年に小銃、蒸気船、紡績機械を購入して帰国しました。その後も長崎にて勤めていましたが、慶応4年(1868)に外国事務局判事に任ぜられたことから大阪に在勤し始め、以後、川口の運上所(税関)では政府の役人として大阪開港前後の諸問題を解決し、造幣寮(後の造幣局)設置にも奔走しました。明治2年(1869)に横浜転勤命令が下されたことを嫌気して辞表を提出。下野した後は、民間人として大阪経済発展の基礎を築きました。鹿児島士族・五代友厚は明治18年(1885)9月20日に本籍を鹿児島から大阪に移し、その5日後に太く短い生涯を終えました。



① 大阪製銅会社

鉱山経営、金銀分析所の設置など、明治初期から五代は鉱物を利用したビジネスを行いましたが、次第に産銅から製銅へと進みます。明治12年(1879)には製銅会社設立の準備を始め、陸軍省の伸銅機械の払い下げを求めも却下され、イギリスから機械を輸入しました。翌明治13年(1880)8月に中之島の玉江橋南詰にて製銅所建築の儀を發起し、明治14年(1881)に三井元之助、鴻池善右衛門、住友吉左衛門、広瀬幸平(住友家総理人)、そして五代という錚々たるメンバーを株主として大阪製銅会社が設立されました。大阪製銅会社は五代生存中にはなかなか成果を挙げることができず、明治20年代になってようやく軌道に乗りかけたものの再び経営に行き詰まり、住友に買収されました。

② 製藍所・朝陽館

五代友厚は、インド製の輸入藍に押されていた国産藍を奨励すべく、ヨーロッパの技術を用いた藍製造に力を入れました。明治6年(1873)には阿波藍を原料としてインディゴを試作、その後、明治9年(1876)9月に朝陽館と名付けた製藍所を田藁橋北詰・堂島浜に設けました。ここで染色技術を学ぶ染色伝習生は約150名を数え、作られた藍はアメリカの博覧会に出品して褒章状をもらう程でした。当初から、朝鮮、中国に支店を設立し、欧米への輸出を計画したようです。明治10年(1877)2月には明治天皇が朝陽館に幸し、五代の案内によって館内を巡覧しました。明治天皇が民間施設を訪問するのは異例中の異例、それ程明治政府が重要視した施設でした。明治11年(1878)8月に設立された大阪商法会議所(初代会頭・五代友厚)は朝陽館内に設けられました。

③ 堂島米商会所

淀屋が淀屋橋南詰に創設した米市場は、元禄10年(1697)に新地が開発された堂島に移転し、享保15年(1730)には江戸幕府公認の米市場となりました。諸藩や米商人の蔵屋敷は中之島に135棟が並び、江戸時代の大坂は物資集散地として市場経済の中心地となり大いに賑わいました。堂島米市場は幕末まで活況を呈しましたが、明治に入り米の流通に統制が効かなくなると明治政府は各地の相場会所を閉鎖し、明治2年(1869)に堂島米会所は閉鎖されました。堂島の衰退を案じた磯野小右衛門、武富辰吉らは米市場再興運動を興して明治4年(1871)に堂島米会所を開設、明治9年(1876)には五代らが中心となって保証有限会社堂島米商会所を設立しました。

④ 五代友厚旧邸

慶応4年(1868)から大阪に勤となった五代は備後町で暮らし始めます。明治2年(1869)には梶木町(現・北浜4丁目。ちょうど日本銀行大阪支店の土佐堀川対岸あたり)へ移り約半年ほど住みました。翌年に備後町に仮居した後は平野町に引っ越し、明治4年(1871)12月から西区朝北通1丁目(現・大阪科学技術センター)に居宅を構えました。料亭・加賀伊(後の花外楼)で行われた大阪会議開催前に盟友・大久保利通が長期間宿泊し、暮盤を間に五代と向き合って日々談義したのはこの邸です。その後、明治18年(1885)1月、中之島(現・日本銀行大阪支店)に邸を新築しました。同年8月には東京で療養生活を送り始め、そのまま同年9月25日に東京で逝去したためにこの邸で暮らした期間は短いものでした。五代の棺は東京・築地から横浜、神戸へと船で、さらに神戸から大阪まで汽車で運ばれた後、中之島の邸に運ばれました。中之島邸にて葬儀が執り行われましたが、葬儀には大阪の恩人・五代を偲ぶ4千数百名の弔問客が訪れ、棺は淀屋橋を南に渡り東へ、心斎橋筋を南下して高麗橋通を東へ堺筋まで行き、堺筋を南下し、阿倍野臺地に向かいました。

⑥ 大阪為替会社、大阪通商会社

明治政府は、各藩がそれぞれ行ってきた外国貿易、商品流通を国家主導に変更すべく、明治2年(1869)2月に通商司を東京、大阪、京都、堺と各開港場に設置し、通商司の監督下に為替会社と通商会社を設けました。明治2年当時、会計官権判事だった五代は、大阪発展のため、豪商らに大阪為替会社及び大阪通商会社の設立を強く働きかけ、五代が官を辞した後、同年8月に両会社が設立されました。為替会社は、預金・貸付・為替・為替札(金券・銀券・銭券・洋銀券)発行など当時の銀行の役割を果たし、通商会社が必要とする資金も供給しました。政府庇護下の為替会社は明治4年(1871)に通商司が廃止されると衰退し、横浜為替会社が第二国立銀行に転じた以外は解散してしまいました。通商会社は国内外の交易管理、商社統括、商品取引の斡旋などを業務としましたが、外国貿易を独占することに対して諸外国から強力な反対を受けたことを主因に解散を余儀なくされました。

⑦ 大阪株式取引所

明治7年(1874)10月に明治政府は株式取引所条例を公布した上で、東京・大阪に一所ずつ株式取引所を開所することを計画しましたが、時期尚早と判断した五代は政府に対して延期を要求し、それが認められました。それから4年後の明治11年(1878)5月、株式取引所条例が公布され、大阪株式取引所が設立されました。それが現在の株式会社大阪証券取引所に繋がります。

⑧ 高麗橋

高麗橋は、江戸幕府架橋の公儀橋で西詰に高札場があり、明治以降は東詰に里程元標が設けられた、まさに大坂の中心でした。高麗橋は明治3年(1870)に大阪初の鉄橋に架け替えられましたが、このとき、鉄材の輸入に尽力したのが五代であり、設計を行ったのが本木昌造(1824～1875)でした。

⑨ 大阪活版印刷所

長崎活版伝習所にて木製の活字を発明していた本木昌造は、長崎に開いた日本初の民間活版所・新町活版所で金属活字鑄造に成功しました。本木は、明治3年(1870)に五代から請われて大阪に活版所を設立しました。

⑩ 大阪商工会議所

明治11年(1878)8月に堂島・朝陽館内に大阪商法会議所が設立されました。同年9月には第1回総会が津村別院で開催され、五代は初代会頭に選出されました。五代は亡くなるまで会頭を務め、死後、2代会頭を藤田伝三郎に譲りました。大阪商法会議所は明治12年(1879)1月に高麗橋4丁目(当時)に移転した後、明治24年(1891)1月に大阪商業会議所と名称変更し、同年3月に朝陽館のあった堂島浜へ再移転しました。五代の銅像は、明治33年(1900)に商業会議所前庭に建立されましたが、昭和18年(1943)の金属回収によって台座以外を供出、再び建立されたのは商工会議所創立75周年を迎えた昭和28年(1953)のことです。大阪商業会議所は昭和21年(1946)9月に社団法人大阪商工会議所、昭和29年(1954)に特殊法人大阪商工会議所となりました。

⑤ 弘成館

鉱業を重視していた明治政府は、明治元年(1868)大阪に銅会所を設置、同年に銅会所→鉱山局→鉱山司と改めます。政府は主要な鉱山を直轄下に置き、外国人技師を招聘して鉱山開発を進めました。また、明治4年(1871)に設置された工部省傘下に鉱山寮を置き、鉱山行政に当たらせました。一方、五代は明治初めから鉱山開発に興味を持ち、天和銅山、蓬谷鉛山、半田銀山などの民営鉱山を買収し、開発を進めました。明治6年(1873)には鉱山経営の管理事務所としての弘成館が創立され、弘成館は明治18年(1885)に新築した中之島邸の隣に移されました。

【注意事項】 この地図は「大阪あそ歩」のまち歩き資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局 電話06-6282-5930(財団法人大阪観光コンベンション協会内) 「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。 <http://www.osaka-asobo.jp> または [大阪あそ歩] でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。